

3.11 以後の「専門性」に関する一考察

— アンソニー・ギデンズと
マルティン・ハイデガーを参照して —

萩原 優騎 *

はじめに

昨年3月11日に発生した東日本大震災と津波、それに伴う原子力発電所事故は、日本における科学技術と社会の関係を改めて問う出来事であった。大地震の影響による停電、放射性物質の拡散などに直面し、多くの人々が日常生活の中で現代の科学技術文明のメリットとデメリットを再認識せざるを得なかったと思われる。現状を知るための重要な手がかりとされたのは、地震や原発の専門家が発信した情報である。⁽¹⁾しかし、それらには互いに相容れないものも多く、専門家知識の不確実性を露呈するものでもあった。そのことについて、人文・社会系の研究者たちも含め、科学技術の専門家ではない人々が様々な議論を展開している。2012年3月3日に国際基督教大学で開催された「ICU 哲学研究会 第5回研究会・総会」も、そうした機会の一つであった。⁽²⁾基調講演後のフロア・ディスカッションでは、来場者の一人から「人文・社会系の研究者は科学技術のことをよく知らないのだから、できることは限られているのであり、科学技術の専門家に敬意を払うべきだ」という趣旨の発言があった。この発言が、本稿での考察へと自身を誘うきっかけとなった。この機会に検討したいのは、「人文・社会系の研究者は科学技術のことをよく知らない」という指摘を、どのように考えればよいのかということである。

最初に、現代社会における科学技術の専門性とは何かということを問う。社会学者のアンソニー・ギデンズによる議論に依拠しつつ、近代社会の特徴を見る。まず専門家システムの成立の経緯を、次にシステムが維持される仕組みを論じる。そして、専門家システムに対する人々の信頼が低下した状況と、そこで問い直される意思決定の在り方の問題に言及する。後半では、専門家システムにおける認識の問題を、マルティン・ハイデガーを参照して検討する。出発点となるのは、ハイデガーが諸科学と哲学

* 国際基督教大学社会科学研究所研究員、国際基督教大学教養学部非常勤講師

を区別したことである。この区別により、諸科学がダイナミックに展開され得る条件と、その条件を問う哲学の課題が明らかになる。続いて、専門家とその知見を求める人々との関係が問題になる。そこでは専門家知識の硬直化が生じる可能性があるものであり、それに対する責任は専門家だけでなく人々の側にもあるということ、ハイデガーの見解を参照して考察する。最後に、以上の作業を通じて明らかになった点を改めて確認することにより、科学技術の専門家システムの諸問題に人文・社会系の研究者はどのように関わり得るのかということを示す。

I. 近代社会と専門性

1. 専門家知識の台頭

現代社会においては、科学技術が人々の日常生活の中で重要な位置を占めている。そのような社会状況は、近代以降の価値や制度の変化の中から誕生した。アンソニー・ギデンズは、近代以前と以後の知識形態は異なると論じる。ギデンズは、近代以前の状況を「伝統的文化」と表現する。「伝統的文化では、過去は尊敬の対象であり、また諸々の象徴は、それが幾世代もの経験を内包し、経験を末代に伝えるものであるために尊重されてきた。伝統とは、行為の再帰的モニタリングを共同体の時空間組織と結びつけていく様式である。伝統は、時間と空間を操縦する手段であり、個々の活動や経験をいずれも、過去、現在、未来からなる連続性のなかに挿入していき、代わって時間や空間を、社会の実際の営みの繰り返しによって構造化していく」。⁽³⁾「再帰性」は、ギデンズが近代化を論じる際のキーワードの一つである。それは、「自らを他者に映し出して、それによって自己を規定していく概念」と定義できるだろう。⁽⁴⁾「自己言及性」と表現してもよいはずであり、その作用は社会レベルにも個人レベルにも見られる。ただし、近代以前の再帰的モニタリングと近代以降のそれは、特徴が異なる。「前近代の文明では、再帰性は、依然として伝統の再解釈と明確化だけにほぼ限定されており、その結果、時間の尺度においては『未来』よりも『過去』の側により多くの比重が置かれていた」。⁽⁵⁾

このような状況が、近代になると大きく変化する。「再帰性は、システムの再生産の基盤そのもののなかに入り込み、その結果、思考と行為とはつねに互いに反射し合うようになる」。⁽⁶⁾もちろん、近代社会において「伝統」が全て失われたわけではない。「しかし、伝統の果たす役割は、現代の世界での伝統とモダニティとの融合に着目する論者が想定するほどには、概して大きくはない。なぜなら、正統と認められている

伝統は、見せかけの衣をまとった伝統であって、その存在証明を近代の有する再帰性のみから得ているからである。近代の社会生活の有する再帰性は、社会の実際の営みが、まさしくその営みに関して新たに得た情報によってつねに吟味、改善され、その結果、その営み自体の特性を本質的に変えていくという事実に見いだすことができる」。(7) あらゆる営みが不断に吟味されていくなれば、不変のものと思定できるような基盤は存在し得ないことになる。「近代という時代状況のもとでは、いかなる知識も、『旧来の』意味の、つまり、『知ること』が疑問の余地のないものにならねばならないという意味での知識では《ない》。このことは、自然科学についても社会科学についても同様に当てはまる点である」。(8)

こうして、再帰的な知識とその運用を基礎とした社会システムが構築された。そのシステムは、近代以前のものとは比べて高度の専門性を有するものであり、ギデンズはそれを「専門家システム」と呼ぶ。「専門家システムとは、われわれが今日暮らしている物質的、社会的環境の広大な領域を体系づける、科学技術上の成果や職業上の専門家知識の体系のことをいう」。(9) 社会や日常生活を運営していくためには科学技術が多くの場面で不可欠であり、そこに専門家が関与している。日常生活において人々は、専門家システムの機能を自明なものとして受け止めている。自明であるゆえに、日常の中では人々がシステムの作動を改めて意識することは少ない。人々は、専門家の知識やその作動について、詳しくは知らないことが多い。そこには一種の「信仰」があると、ギデンズは述べる。「私は、その人たちのおこなったことがらを『信じて』いる。私の『信仰』は、たとえその人たちの能力を信頼しなければならないとしても、その人たちにたいしてではなく、その人たちの適用する専門家知識——通常、私が自分では完全に点検できないもの——の信憑性に置かれている」。(10) これが「信仰」と呼ばれるのは、特定の領域の専門家ではない人々が、当該のシステムについての専門家知識を背景とした根拠を持たないまま、そのシステムの安定性を信じているからである。「『信仰』には、専門家システムが通常想定されているとおりに作動するという経験にもとづく、実際的な側面がある」。(11)

2. 専門家システムを維持する仕組み

近代社会に成立した専門家システムは、どのように運営され維持されてきたのだろうか。そのことを説明するために、ギデンズは「脱埋め込み」《disembedding》という概念を使用する。先述のように、近代においては伝統がその効力を弱めていった。

その際に、人々が近代化を遂げる以前の段階においては密接な関係にあったローカルティとの一定の距離が生じる。その現象が、「脱埋め込み」と呼ばれる。それは、「社会関係を相互行為のローカルな脈絡から『引き離し』、時空間の無限の拡がりのなかに再構築することを意味している」。(12) 伝統の効力が弱まったのは、近代化に伴う価値や制度の変化だけでなく、技術の性質が変わったことにもよるといふ。ギデンズは、一例として時計の発明を挙げる。近代以前の社会では、自然界の周期的出来事によって時間の測定がなされてきた。(13) ところが、機械時計が普及するにつれて、状況は変化する。「時計は、『空白な』時間という均一の次元を表示し、その結果（たとえば、『勤務時間』といったかたちで）一日を正確に『带状区分』できるように、時間を定量化していった」。(14) こうして、時間の管理はローカルな環境に左右されにくくなり、地域を超えて人々の生活は標準化されていく。「時間と空間が分離し、両者が標準化された『空白な』次元を形づくっていくことで、社会活動は、目の前の特定の脈絡への『埋め込み』から解き放たれていく。特定の脈絡からの脱埋め込みをとげた制度は、時間—空間の拡大の範囲を大幅に押しひろげ、その結果、時間と空間を超えた調整に依存していく」。(15)

しかし、脱埋め込みを遂げた近代社会では、ローカルな要素が不要になるというわけではない。専門家システムを基盤とした社会における人間関係を、ギデンズは「顔の見えないコミットメント」と呼ぶ。人々は専門家自身に対してよりも、その知識やシステムが正常に作動することに対して「信仰」を持つ。人々の信仰の対象は具体的な人物ではないのであり、その意味で専門家システムの別名は「抽象的システム」である。ただし、このような「信仰」が機能するには、「多くの場合、そうしたシステムに責任を負う人間や集団との出会いを必要としており、私は、こうした人間や集団との出会いのことを、抽象的システムへの《アクセス・ポイント》と名づけておきたい」。(16) アクセス・ポイントでの「出会い」においては、「顔の見えないコミットメント」を支える「顔の見えるコミットメント」が機能していると、ギデンズは論じる。それは、「ともにそこに居合わしている状況のもとで確立する社会的結びつきによって維持されたり、あるいはそうした結びつきのなかに表出される信頼関係のことをいう」。(17) 「顔の見えるコミットメント」は、脱埋め込み化された状況を補完する役割を果たすものであり、「再埋め込み」《reembedding》と表現される。それは、「脱埋め込みを達成した社会関係が、(いかにローカルな、あるいは一時的なかたちのものであっても) 時間的、空間的に限定された状況のなかで、再度充当利用されたり、作り直さ

れていくことをいう」。(18)

「顔の見えるコミットメント」が有効に機能するための一つの条件は、アクセス・ポイントにおける専門家の態度やふるまいである。「アクセス・ポイントでは、一般の行為者を信頼関係に組み入れる顔の見えるコミットメントは、『平常どおり営業中』という態度、つまり、落ち着き払った態度と結びついた信頼性や誠実さの明示を、通常必要としている」。(19) その例として、医師や裁判官の威厳のある態度や職業意識、ギデンズは挙げている。さらに、「顔の見えるコミットメント」は専門家と一般の人々との関係だけでなく、専門家同士の関係においても重要な役割を果たしているという。「職業意識という規範は、法的拘束力によって支えられる場合もあるが、仕事仲間や同僚の信頼性を内部管理するための手段のひとつとなっている。しかし、自分たちの維持する抽象的システムに本来的に身をゆだねているように思える人々にとってさえ、顔の見えるコミットメントは、長続きする信頼を生み出す方法として、通例、重要である。このことは、社会関係の再埋め込みの典型的な例である。再埋め込みは、この場合、仕事仲間の信頼性やその誠実さにたいする信頼を確固たるものとするための手段となるからである」。(20)

3. 専門家システムへの信頼の低下

専門家システムを基盤とした秩序が不安定化した状況を、社会学者のウルリッヒ・ベックは「リスク社会」と呼んだ。ベックは、近代化における科学の発達を二つの段階に分ける。第一の段階では、専門家システムが安定的に機能していた。ところが、第二の段階に至って、「科学は自らの生み出した物そのもの、自らの欠陥そして科学が生み出す結果として発生する諸問題と対決しなければならない」。(21) しかも、直面する問題に対して、専門家が有効な解決策を示すことができるとは限らない。こうして、専門家知識の不確実性が深刻な問題となる。「近代のリスク環境にたいする認識が一般の人びとの間に広く浸透していった結果、人びとは、専門家知識のもつ限界に気づくようになる」とギデンズは論じる。(22) この「限界」は、科学技術社会論で「トランス・サイエンス」と呼ばれるものに相当する。それは、「科学によって問うことができるが、科学によって答えることのできない領域」である。(23) ある種のリスクが科学的に示されたとしても、どこまでを許容可能なリスクと見なすのか、与えられたデータに基づいてどんな意思決定を図るのかといったことについて、科学そのものだけから答えを導出することはできない。

専門家システムの自明性が機能していた時には、このような問題は見えにくかった。それは、専門家が意思決定の権利を独占しているという状況が一般的だったからである。「危険は専門的に、そしていちいち専門家の権威づけをふまえて客観的に、しかも拘束力を持つ形で、認定しうる可能性を与えられる。科学は『危険を認定』し、国民は『危険を知覚』することになる。この線からはずれることは、『非合理』と『技術に対する反感』の尺度となる。世界は危険を知覚している者と、危険を知覚していない者に二分される。その場合、大衆は危険を知覚していない者に属するということになる」。(24) したがって、「危険を知覚していない者」に対する「啓蒙」という発想が生まれる。「国民一人ひとりのイメージは、まだ十分に専門知識を有していない素人技術者ということになる。こういう人間には技術に関する詳しい知識を与えてやればよい。そうすれば、専門家と同じように、技術が操作可能なものであり、危険といっても本来は危険でない、と考えるようになるだろう。大衆による反対、不安、批判、抵抗は純粋に情報の問題なのである。技術者の知識と考えを理解さえすれば、人々は落ち着くはずである」。(25) このような前提に基づく意思決定の在り方は、「欠如モデル」と呼ばれる。すなわち、「知識を持つ者と持たない者」というフレームで語られ、専門家からの一方的な知識の伝達を仮定しているということである。(26)

ところが、現在では欠如モデルが機能しにくくなっている。「専門家システムにたいする信頼を支える信仰は、一般の人が専門家知識の主張に直面した際に無知であるという、情報の遮断を必要としている。しかし、専門家自身も、実務家のひとりとして知識のすべての分野に精通しているわけではないことを一般の人びとが知れば、その人たちのいづく専門家システムにたいする信仰はぐらついたり、徐々に崩れていくかもしれない」。(27) 福島原発事故以降、日本ではこのような傾向がこれまで以上に顕著になっている。すると、欠如モデルと異なる意思決定の在り方が必要になるはずであり、実際にその模索もなされてきた。(28) また、日常生活の中で様々なリスクに対処するために、人々の自発的な動きも見られるようになってきている。「リスクのもたらす影響や意味の解釈については、科学的な知識体系が必要とされ、科学者など専門家の権限は未だに大きい。しかし、リスクそのものの定量性や可視性という点では、リスクを計測するテクノロジーの精密化・モバイル化・リアルタイム化によって民主化あるいは大衆化され、専門家の権力は弱められている。モバイル機器によって個人がリスクを精密かつリアルタイムに計測できることで、国家が『科学的』に定義した立ち入り禁止区域以外にも、放射能汚染の強いホットスポットが存在することが示

され、ときには自主避難が行われるのはその例だろう」。(29)

Ⅱ. 方法の問いとしての『存在と時間』

1. 諸科学と哲学

以上において、現代社会の特徴の一つである専門家システムとその状況の変化を論じた。次に考えなければならないのは、専門家システムにおいて専門家はどのようにふるまうのかということである。それは、専門家だけの課題ではなく、その知見を求める人々の認識に関わる事柄でもある。このような問題を根本的に考察している先行研究の一つとして、マルティン・ハイデガーの『存在と時間』を挙げることができる。(30) ハイデガーにおける方法の問いを中心に探究する田中敦は、本稿の冒頭に記した研究会合にて、大地震と原発事故以降の日本社会の専門家システムに関する問題提起を行った。「巨大で制御し難い自然の威力、そして場合によってはそれ以上に巨大で壊滅的な放射能のもたらす惨禍が我々をおびえさせるより以上に重大な問題を我々は看過している可能性があることをよく考える必要がある」。(31) この問いの出発点に置かれているのは、現代社会に哲学者がどのように関わるのかということである。「今日の日本で様々な問題が起きたとき、色々な分野の人が新聞や雑誌で意見を求められるが、哲学者が意見を求められることはまずないという現実を問題にし、それは日本の哲学研究者が西洋のあるいは東洋、日本の特定の思想の紹介と解釈に終始しているからでないかという厳しい批判を表明している哲学教授がいる。よく言われることでもあるが、この真剣な内部告発、内的批判は真面目に考えるべきものだといえる。しかし問題はそれだけだろうか」。(32)

田中によると、報道とそれに対する情報の受け手となる人々の期待には、今日の専門家システムに基づく社会においては問いの対象になりにくい共犯関係があるという。「どれほど事態が深刻であっても簡単に見出せる回答があればそれでよしとされているのではないか、こうした疑念は排除できない（今回はそうした答えが見出せないから、『そのこと故に』深刻だとされているのではないか）。そしてもしそうであれば、そのように求められる問いに哲学が答えようとしたら、それは哲学の否定になってしまうのではないだろうか」。(33) 「哲学の否定」ということの意味を理解するには、ハイデガーが『存在と時間』の冒頭で示した事柄を検討しなければならない。ハイデガーは、諸科学と哲学とはどのような点で異なるのかということ、そこで論じている。諸科学の研究がダイナミックであり得るのは、以下のような条件を満たす場合であるとい

う。「諸科学の本当の『動き』は、その基礎概念に加えられる——透明な自覚をもってなされる、多かれ少なかれ根本的な——改訂作業のなかで起こっているのである。一学問の水準は、それらの基礎概念がどれほど深い危機に際会することができるか、ということから決定される」。(34)

「基礎概念の危機」とは、既存の自明性が問われる場面を指す。「基礎概念とは、それぞれの科学のあらゆる主題的対象の根底にある事象領域についての諸規定であって、この領域はこれらの規定においてあらかじめ理解され、そしてこの理解があらゆる実証的研究を先導することになるのである。したがって、これらの基礎概念に真正の証示と『基礎づけ』を与えるためには、それに相応して先行的に事象領域そのものを究明しなくてはならないわけである。ところで、これらの事象領域は、それぞれ存在者そのものの領域から得られるものであるから、ここで述べたような形で基礎概念を汲みあげる先行的な探究とは、この存在者をその存在の根本構成について解釈するという仕事にほかならない。かような探究は、実証的諸科学に先駆しなくてはならないし、先駆することができるのである」。(35) これをなし得るのが哲学であり、ハイデガーはそれを存在への問いとして立てる。「存在への問いは、存在者をしかじかの存在者として探究していてそのさいいつもすでにある存在了解のなかでうごいている諸科学の先験的可能条件をめざすにとどまらず、存在的諸科学に先行してこれらをもとづけているもろもろの存在論そのものの可能条件をめざすものなのである」。(36) すなわち、哲学自体の前提も問いに付されることになる。

人々の思考で自明の前提となっているものを、ハイデガーは「伝統」と表現する。「ここで支配権を握る伝統は、それが『伝授』するものを近づきやすいものにするどころか、むしろさしあたりたいいは、それを蔽いかくすものである。伝統は、在来のものごとを当り前のものとして人びとの踏襲にまかせ、かつて伝統的なカテゴリーや概念が多少とも真正な仕方そこから汲みあげられてきた根源的な『源泉』への通路をふさいでしまう。それどころか、伝統がかような来歴を人びとにすっかり忘却させることさえあるのである」。(37) このような事態への取り組みは、「解体」と表現される。「固定化した伝統を解きほごして、その伝統が生みだしてきた蔽塞状態を解消することが必要となる。この課題をわれわれは、存在問題を手びきとして古代的存在論の伝承的形態を解体し、かつて存在の最初の——そしてそれ以来主導的となった——諸規定がそこで得られた根源的諸経験へひきもどす解体作業（Destruktion）という意味でうけとる」。(38) これが哲学の課題であるとすれば、簡単に見出すことのできる回答を人々

から求められ、専門家の一人として哲学者がそれに応じることは、「哲学の否定」となるだろう。田中は言う、「他の諸分野からは意見が求められても哲学から求められることはない、ということはどうに考えられるだろうか。端的に言ってみると、それは常日頃我々にとって馴染みになっている『専門家』という語の多用という抽象的で貧しい思考と関係しているように思われる」。(39)

2. 専門家であるということ

では、「専門家であること」をどのように理解すればよいだろうか。「具体的に会われる場面、その時の限定なしに専門家と呼べるものは真実には存在していない。そのことを記述によって見てみよう。『その分野についての専門家』(about, über)『その分野の専門家』(of, von)と『その分野に於ける専門家』(in)との違いである。前者は肩書きがそうであるように、その人に現実に専門家『として』出会っているかそうでないかに関係なしに、その人を『外的に』特徴付けるものである。だから『についての』も『の』も、単なる『専門家』というのと同じ程度に抽象的である。よく知られたハイデガーの用語を使えばそれは直前的(事物的)存在者と言ってよい。それは単なる存在者であって、存在の意味は欠落している(nur noch vorhanden)。それに対して『専門家が存在している』とは、正にその専門分野に『於いて』仕事をしている、活動をしていることを意味する。分野に於いてという規定は単に工作中というだけでなく、共同のまたは競争相手の専門家と共にそこにいるということで、『そこ』でこそ専門家の真価が問われる」。(40)この定義に従えば、専門家は各々の場面でそこに固有な在り方において専門的であるということになる。各々の場面の個別性とは関係のない、既成の知識を当てはめて物事を捉えるという営みは、それぞれの領域の「基礎概念の危機」としてハイデガーが論じた状況が失われ、自明性としての「伝統」が支配していることを意味する。

このことを、簡単に見出せる回答を専門家が求められるという問題との関連で言い換えれば、次のようになる。「専門家がソフィストだと言うのではない。今日我々に馴染みの仕方であられる『専門家』(その出会われ方)がソフィスト的なのである。先ほどの問題は、今日『専門家』は意見を求められるが、哲学者が意見を求められることはないと言い直すことができる。『この場合』明らかに専門家同士の検討、批判、やり取りとは違った事態が成立している。ここで問題となるのは専門家として通用する理解ではなく、その専門家の発言を求め、理解する側、一般人の理解のレベルであ

る。これで『専門分野についての専門家』と『専門分野における専門家』の違いの重要性が明確になるであろう。前者においては専門家と呼ばれる人はいても、専門家は本当は存在していない。⁽⁴¹⁾ ギデンズの見解を引用した際に、「顔の見えるコミットメント」という再埋め込みの機能について論じた。人々と専門家との接点となるアクセス・ポイントにおいて、専門家システムの安定性が維持される。専門家の威厳や落ち着き払った態度、分かりやすい説明によって、専門家システムへの信頼とそれに基づく安定性が補強される。このような安定性は、「基礎概念の危機」が回避された状態であると言えるだろう。

そのことは、専門家システムへの信頼が揺らいだ状況にも当てはまる。そこでは、専門家知識の不確実性が問題になっている。それが問題になるのは、「専門家とは、確実な知識を提供できる人物である」という前提が従来は機能してきたからにはほかならない。「人体に及ぼす放射線の危険度について、『専門家』の間の意見が違うからどう考えてよいか解らず困ってしまう」といわれる。『分野についての専門家』であれば、その意見がその分野の専門家の見解として通用してしまう。しかし、現実に専門家『である』場合、その認識、理解は日々吟味され、絶えず反論され、批判され、修正されていくはずである。そうした探求の営みがなくなった場合、その人は『専門家』と呼ばれても、『専門家として』存在しているとは言えない。⁽⁴²⁾ ここで注意したいのは、専門家知識の特徴の一つとしてギデンズが論じている点である。「専門知識は、定式的真理とではなく、知識の修正可能性にたいする確信と、つまり、方法的懐疑心に依拠する確信と、結びついている」。⁽⁴³⁾ この定義は、ハイデガーが「基礎概念の危機」として論じていることと重ねて理解できるだろう。ただし、危機の到来に対して諸科学が開かれているからといって、各々の専門家が常に危機を自覚できているとは限らない。

さらに、物事への批判的な認識がなされないことに対して、専門家だけに責任があるというわけではない。「千年単位の問題の存在を指摘する『専門家』は、その専門分野に於いて専門家として存在する限り、これらの数字が意味するものを、われわれの日常生活の時間や日数と無造作に比較し理解することからは隔てられ守られている」と言える。ところが『専門家』の意見を求める側の一般人の場合、先ずたいいは自身の関心事の延長上で、その大きな数値を理解してしまうことから保護されていない。何事もなければ、新幹線は停車駅ではきちんと停車するのであり、窓外の生活と何ら変わらない時間を過ごしていると思っていられるわけである」。⁽⁴⁴⁾ これは、専門

家システムへの「信仰」とギデンズが表現した事態である。専門家システムが何の問題もなく作動することを人々は自明なものとして受け止め、それを認識することもなく日常生活を送っている。それに加えて、すぐに使えるものを専門家に期待し、専門家もその期待に応えようとするという、田中が指摘した共犯関係の問題もある。ハイデガーならば、次のように言うだろう。「すぐ使えるようになっている既知の存在構造が、その土着性についてはつつみかくされたままで備わっていて、こういう存在構造やそれらについての概念が、なにかの『体系』の内部でもっともらしく幅をきかすということがあろう。これらは、体系のなかで『構成的』に組み合わせられているために、もはやそれ以上の釈明を要しない『明白な』ものと思われ、それゆえにそれから出発する前進的な演繹の拠点としてはたらくようになってしまう」。(45)

3. ソフィストとの対決

したがって、専門家だけでなく、その情報の受け手となる人々にも自己批判的な認識が求められる。自己批判的な認識を欠いた日常における人々の様態を、ハイデガーは「世間話」と表現した。「だれかが言ったということ、格言、宣言だけで、もうその話とそれの了解とが真正妥当なものであるということの請け合いになる。そして、話すことが話題の存在者への第一義的な存在連絡を失っており、あるいはまだ取得していないために、その伝達もこの存在者の根源的領得というありさまでおこなわれず、吹聴と受け売りをつうじておこなわれることになる。話された話は次第に広い範囲に波及し、権威的性格を帯びてくる。物事は、ひとがそう言うから、そうなのだ、と断定される。このような受け売りや吹聴によって、もともと土着性が欠けていたものが完全な無根さへ募っていくが、こういう話のなかで構成されるものが世間話である」。(46) 同様の事態は会話だけでなく、書かれたものにも当てはまるという。「読者の平均的理解は、なにかが根源から汲みあげられ、苦闘のうちにたたかいとられたもので、なにかたんなる受け売りであるかを、決して判定することができないであろう。それだけではない。平均的理解というものは、そもそもかような判別を望まず、その必要を認めないであろう」。(47)

日常の自明性が支配している時、人々はそこでの自身の理解を問い直そうとしない。より正確に言えば、問い直す必要があること、認識が改まる可能性があることも自覚されにくい。「世間話は、もともとから、——すなわち、話題にのぼる存在者の地盤へ立ちもどつてみることを怠っているという固有的不作為によって——、一種の閉

鎖なのである。さらに、世間話は、そこで話題になっているものごとの理解がすでに達成されたと思っているので、この臆断にもとづいて、あらゆる新しい問いと対決とを封じ、それらを一種独特のありさまで抑圧し渋滞させるので、このことによってその閉鎖がいよいよ穴ずることになる」。(48) 既に理解が達成されていると考える時、あるいはそのように改めて考えるまでもないほどに自明性が支配している時、人々の思考には自己批判的な契機が不在となる。ただし、我々は常に日常の自明性の只中に生きているのであり、そこから独立した「真理」なるものを想定できるわけではない。「現存在はまずこの日常的な既成的解意のなかへ生い立ってきて、終生その影響を脱しきることができない。すべて、真正な了解や解意、伝達、再発見と新しい領得は、この既成的解意のなかで、そのなかから、それに反抗しつつ、おこなわれるのである。いつか現存在がこの既成的解意の汚染や誘惑をうけずに、『世界』自体の処女地に直面して、そこで自分に出会うものごとを眼のあたり観照する、などということにはならないのである」。(49)

日常における人々の在り方について、「これを、われわれは現存在の頹落 (Verfallen) と名づける。この名称は、なんら否定的な評価を表明するものではなくて、現存在がさしあたってたいていは、配慮された『世界』のもとにたずさわっているということにほかならない。このように……にたずさわってそれに融けこんでいることは、たいていは、世間の公開性のなかでわれを忘れていたという性格をもっている。現存在は本来的な自己存在可能としてのおのれ自身から、さしあたってはいつもすでに脱落して、『世界』へ頹落している。『世界』へ頹落しているということは、世間話や好奇心やあいまいさによってみちびかれているかぎりでの相互存在のなかへ融けこんでいるということである」。(50) 世間話に没頭した状況は問い直されるべきだとしても、先述のように、そこから独立した「真理」なるものは存在しない。そうであるならば、日常を単に否定的なものとして位置づけるのではなく、その只中においてこそ問い続けていかなければならない。その意味で、日常を「伝統」として形成してきた過去もまた、問い直されるべきものであるとしても、単に否定すればよいものではない。「われわれの解体作業は、過去に対して否定的態度で接するものではなく、その批判はむしろ『今日』に向けられ、そして今日有力になっている存在論史の取り扱い方——その構想が学説誌的であれ、精神史的であれ、また問題史的であれ——にむけられているのである。解体作業そのものの意図は、過去を虚無のなかに葬ることにあるのではなく、それには積極的な狙いがある」。(51)

こうして、日常の只中においてその基盤となる「伝統」を問い直すという作業は、そこに生きる自身の認識への批判となる。田中によると、日常生活における自明性に支配された理解、そしてその範囲内で受容可能な専門家知識の提供を期待する態度において、人々は最大のソフィストである。「専門家がソフィストであるのではなく、最大のソフィストが専門家を『専門家』に仕向けていると言ってよい。その意味で哲学者は最大のソフィストと対決することが必要不可欠になる。しかも哲学者は最大のソフィストと異質な存在ではなく、まさにその一員でもある。それ故そこで求められるのは、一定の結論を答申のような形で提示するのではなく、最大のソフィストでもある自分が、自分自身に於いて自分を批判し、自分と戦うことになる」。⁽⁵²⁾ 専門家システムの問題を問う哲学者も、そのシステムの一員であるということを実感しなければならない。したがって、この問いはそれを発する自身にも突きつけられることになる。

おわりに

以上の考察を通じて、本稿の冒頭に掲げた問いに応答する準備が整ったと考える。むしろ、これまでの記述そのものが答えであると言ってもよいと思われるが、改めて論点を明確にしておきたい。「人文・社会系の研究者は科学技術のことをよく知らない」という否定的な評価は、二重の意味で正確ではない。第一に、「トランス・サイエンス」という言葉で表現したように、現代社会が抱える科学技術をめぐる様々な困難は、「科学によって問うことができるが、科学によって答えることのできない領域」に関わっている。科学技術の専門家の知見が重要な意味を持っているとしても、その専門家知識によって解決することのできない領域が存在する。したがって、「科学技術のことをよく知らない」人々の意思決定への参加こそが求められているのである。⁽⁵³⁾ そのように述べることは、科学技術についての専門家知識を軽んじることを意味するわけでは決してない。科学技術によって問うことのできる範囲、科学技術に一定の解決を求めてよい範囲を理解するということをおろそかにするならば、トランス・サイエンスという状況における意思決定が有効なものになり得ないことは明らかである。

第二に、「人文・社会系の研究者は科学技術のことをよく知らない」と言われる時、確立された知識を持つ人物として専門家が理解されている。しかし、ハイデガーと田中の問いを通じて考察してきたように、そのような理解において想定されているのは、自身の専門領域に関わる「基礎概念の危機」に直面することを回避している専門家で

あった。そして、既に確定した科学的「真理」なるものを期待する人々に専門家が応じようとすることによって、自己批判的な認識の欠如した状況を生み出す共犯関係が、専門家と人々との間で生まれる。この共犯関係の自明性を批判的に問うならば、どんなに優れた科学技術の専門家であっても、自身の研究領域についての確定した科学的「真理」などは「知らない」ということに気づくはずである。⁽⁵⁴⁾そして、そのことは当該の分野の専門家ではない人々にも当てはまる。確立された知識を専門家に期待すること、あるいはそのような知識を受け取り、自身の現時点での理解を自明なものとすることによって、理解が変容し得る可能性とその可能性に気づく機会を、人々は自らの認識から除外している。

そのことを指摘する人文・社会系の研究者も、例外ではない。例外ではないということには、二つの意味がある。一つは、人文・社会系の専門家知識についても、全く同じ問題が生じ得るということである。ハイデガーが諸科学と哲学を区別し、諸科学の前提を問い直すことを哲学の課題としたこと、そして哲学の前提自体をも疑問に付さなければならぬと論じたことの意義は、まさにこの点にあると言えるだろう。⁽⁵⁵⁾人文・社会系の研究者は、科学技術のみならず、自身の関わる領域についても、確定された「真理」なるものを「知らない」ことを常に自覚しておかなければならない。そうした自覚から出発することなしには、自己批判的な認識の継続的な実践は不可能であろう。もう一つは、このような認識の重要性を唱える者自身もまた、その主張において確定された「真理」を想定してしまう可能性があるということである。したがって、自己批判的な認識についての問いは、その問いを発する当人にも向けられたものでなければならない。

注

- (1) 人々は、専門家の情報のみに依拠していたというわけではない。Twitterなどでつぶやかれる「風評」や「デマ」を頼りに自分なりのやり方で行動する人々を、避けるべきリスクと見るか、新たな可能性への一つのチャンスと見るかと、美馬達哉は問題提起している。(美馬、245頁)
- (2) 当日のプログラムと基調講演の要旨については、以下で確認できる。
<http://subsite.icu.ac.jp/org/philos/history.htm> (最終アクセス日：2012年4月29日)
- (3) Giddens, p.37 (邦訳 54頁)
- (4) 中西、4頁
- (5) Giddens, pp.37-38 (邦訳 54頁)
- (6) *Ibid.*, p.38 (邦訳 55頁)
- (7) *Ibid.* (邦訳同上)
- (8) *Ibid.*, p.40 (邦訳 57頁)
- (9) *Ibid.*, p.27 (邦訳 42頁) 専門家システムを支えているのは、専門家集団としての諸科学の研究者たちの共同体である。そうした共同体の形成過程については、本稿の主題ではないので立ち入らない。詳細は、[村上]を参照。
- (10) Giddens, pp.27-28 (邦訳 43頁) 「専門家」という概念の定義には、注意を要する。「専門家と対比して『素人』、『非専門家』、『一般市民』とひとくくりにされる人々もまた、その内訳は実に多様であり、おのおのが消費者や職業人、それぞれの地域の住民として、自分の生活や職業、地域について独特の知識や経験をもっている。場合によっては、何らかの専門分野の職業的な専門家である場合もある」。(平川、58頁) また、ある分野の専門家であっても、その分野や周辺領域以外については非専門家であると言えるだろう。
- (11) Giddens, p.29 (邦訳 44頁) それに対し、近代以前の社会では技術が可視的であり、人々は自身の生活を支える様々な技術について十分に認識を持つことができたこと、村上陽一郎は指摘する。(村上、115頁)
- (12) Giddens, p.21 (邦訳 35-36頁)
- (13) *Ibid.*, p.17 (邦訳 31頁)
- (14) *Ibid.* (邦訳 31-32頁)
- (15) *Ibid.*, p.20 (邦訳 34頁) 空間の空白化には、世界地図の誕生が大きく寄与したという。「前近代の社会では、ほとんどの人びとにとって、社会生活の空間的特性は『目の前にあるもの』によって——特定の場所に限定された活動によって——支配されていたため、場所と空間とはおおむね一致していた。(Ibid., p.18 [邦訳 32-33頁]) ところが、近代においては両者が切り離されていく。「ひとつは、明らかに地の利をえた場面とは無関係に空間の表示が可能になること、もうひとつは、さまざまな空間をその構成単位ごとに別の空間に置き換えできるようになること」であり、「世界地図は、空間を、特定の場所からも地域からも『独立した』存在として確立していった」。(Ibid., p.19 [邦訳 33頁])
- (16) *Ibid.*, p.83 (邦訳 106-107頁)
- (17) *Ibid.*, p.80 (邦訳 102頁)
- (18) *Ibid.*, pp.79-80 (邦訳同上)
- (19) *Ibid.*, p.85 (邦訳 108頁) 「偶然の好機やまぐれ当たりといった要素がまったく影響しないように、

細心の注意を込めて磨き上げた技能や、すべてを網羅するような専門家の知識は存在しない。専門家は、こうした要素がどれだけ頻りに専門家の職務遂行に入り込むかを一般の人びとが気づかなければ、その人たちはもっと安心できるはずであると、通常思い込んでいる」。(Ibid., pp.86-87 [邦訳 110 頁]) 一方、専門家としての医師や裁判官の態度や職業意識の表出を、人々が文字通り受け止めているとは限らない。それでも、専門家らしい言動が人々に一定の安心感をもたらすということは確かだろう。

- (20) Ibid., p.87 (邦訳 110-111 頁)
- (21) Beck, S.254 (邦訳 317-318 頁)
- (22) Giddens, p.130 (邦訳 162 頁)
- (23) Weinberg, p.209 ベックは、以下のように説明している。「例えば、原子炉の安全性に関する研究は、事故を想定してはいるが、その研究対象を、数量化し表現することが可能な特定の危険を推定することだけに限定している。そしてそこでは、推定された危険の規模は研究を開始した時点から既に技術的な処理能力に制約されてしまっている。これに対し、住民の大半や原発反対者が問題にするのは、大災害をもたらすかもしれない核エネルギーの潜在能力そのものである。目下事故の確率が極めて低いと考えられていても、一つの事故がすなわち破滅を意味すると考えられる場合には、その危険性は高すぎる。さらに、科学者が研究の対象としてこなかった危険の性質が大衆にとっては問題なのである。例えば、核兵器の拡散、人的なミスと安全性との矛盾、事故の影響の持続性、技術的決定の不可能性などであり、これらはわれわれの子孫の生命をもてあそぶものである」。(Beck, S.39 [邦訳 40 頁])
- (24) Ibid., S.76 (邦訳 89 頁)
- (25) Ibid. (邦訳同上)
- (26) 藤垣、81 頁
- (27) Giddens, p.130 (邦訳 162 頁)
- (28) 欠如モデル以外の意思決定モデルについては、[藤垣]を参照。
- (29) 美馬、244 頁
- (30) 『存在と時間』は、これまで様々な読み方がなされてきたのであり、本稿において示そうとするのもその一つの可能性である。「1930 年代にはドイツ実存哲学の、次いで第 2 次世界大戦終結後は、サルトルやメルロ＝ポンティによって領導されたフランス実存主義の、聖典のようにして読まれてきた。そして、1960 年代になると、おかしなことに、その実存主義への対抗イデオロギーとして登場してきた構造主義が、さらに 1970 年代以降は、フォーコーやラカン、ドゥルーズ、リオタール、デリダといった思想家によって代表されるフランスのいわゆるポスト構造主義が、やはりハイデガーをその思想的源泉と見なすことになる」。(木田、2 頁) なお、ハイデガーには技術論の著作もあるが、本稿では田中の問題提起を手がかりとして方法の問いに限定して考察する。
- (31) 田中、2 頁
- (32) 同上 ここで田中の念頭にあるものの一つは、森岡正博の論考であると思われる。田中は、かつて国際基督教大学教養学部の哲学の講義で森岡の問いに言及し、ハイデガーの方法との関連で考察している。森岡は言う、「私がやりたいのは、カントがどう考えていたかということではない。私がやりたいのは、私がどう考えればいいのかということなのだ。哲学とは、そもそもそういうことではなかったのか。哲学するとは、いまこの 1 回限りの人生のなかで、この私が、この私に

とって切実きわまりない問題に正面から戦いを挑み、この私のことばと思考でもって答えを模索していく試みのことではなかったのか」。(森岡、2頁)

- (33) 田中、2-3頁
- (34) Heidegger, S.13 (邦訳 43頁)
- (35) *Ibid.*, S.14 (邦訳 44-45頁) ハイデガーが述べている諸科学と哲学の区別を、田中は次のように表現する。「それは哲学以外の諸学問はそれぞれに特定の対象群、その研究領域というべきものを研究に先立ってもっているということである。哲学には特定の対象領域がない。このことは、哲学はたんに対象の認識に終わるのでなくその認識している者のあり方を問題にすること、『よく生きる』というテーマと切り離せないということが関係していると言ってよい」。(田中、3頁)
- (36) Heidegger, S.15 (邦訳 46頁) なぜ存在への問いという形をとるのかということについて、木田元は以下のように説明している。「つまり、『特殊的な諸学問』、いわばさまざまな個別科学、たとえば物理学だの経済学だのは、ありとしあらゆるもの、〈あるとされるあらゆるもの〉、つまりは存在者の全体のうちから、物理現象なり経済現象なり特定の領域を、つまり『ある部分』を『抽出』し、『それに付帯する属性』、つまりその領域的特性だけを研究する。存在者を、それが物理現象であるかぎり、経済現象であるかぎり、で研究するのである。ところが、アリストテレスが『哲学者の学』とか『第一哲学』と呼ぶ学問、つまり狭い意味での『哲学』は、存在者を、それがこんなふうになさまざまな領域に切り分けられるのに先立って、つまりはあくまでそれが『存在者であるそのかぎり』、『全体として』研究しようとする。『存在者を存在者として全体的に』研究しようとするのである。ということは、この学問は、すべての存在者をそのように存在者たらしめている〈存在〉とは何かを問う、ということになる」。(木田、32頁)
- (37) Heidegger, S.29 (邦訳 66頁)
- (38) *Ibid.*, S.30 (邦訳 68頁)
- (39) 田中、3頁
- (40) 同上
- (41) 同上
- (42) 同上、4頁 専門家の見解の不一致には二つの側面があると、ギデنزは論じる。「今日、一見純粋に理知的なことから思えるもの——知識の権利要求が、定式的真理をはぎ取られたために(権利要求に関してなされたいずれのメタ言説も含めて)すべて修正可能であるという事実——は、近現代社会における生存の条件となっている。一般の人びとにとっての帰結は、文化全体にとってと同様、解放だけでなく、当惑をももたらしていく。たった一つの権威の源泉にのみ恭順を示すことが抑圧的である以上、解放をもたらす。一方また、その人の足元から地面を引き裂くことになるため、不安を引き起こす」。(Beck, Giddens & Lash, p.87 [邦訳 164頁])
- (43) *Ibid.*, p.84 (邦訳 159頁)
- (44) 田中、5頁
- (45) Heidegger, S.48 (邦訳 95-96頁)
- (46) *Ibid.*, S.224 (邦訳 359-360頁)
- (47) *Ibid.* (邦訳 360頁)
- (48) *Ibid.*, S.225 (邦訳 361頁)

- (49) *Ibid.*, S.225 (邦訳 362 頁) なぜハイデガーは、あえて「現存在」という表現を用いるのだろうか。木田によると、「彼が人間を〈現存在〉という妙な言葉で呼ぶのも、この事実存在している自分が、まさしく〈存在〉という視点の設定がおこなわれたその〈現場〉だという意味をこめてのことである」。(木田、117 頁)
- (50) Heidegger, S.233 (邦訳 372-373 頁)
- (51) *Ibid.*, S.31 (邦訳 69 頁)
- (52) 田中、9 頁
- (53) だからといって、人文・社会系の専門家が科学技術に対して全く無知であってもよいはずはない。むしろ、責任のある発言と行動のためにも、一定レベルの理解が不可欠である。それゆえ、科学技術の専門家以外をも視野に入れた科学技術教育が課題となる。同時に、科学技術の専門家の側にも、自分たちの専門領域と社会の関係についての、一定の理解が求められる。「それは、現代の科学の先端の学説を細部まで理解するための基礎を準備するために組み立てられたものでないような種類、しかし、科学研究が、社会の成員とどのような関係にあり、どのように自分たちの生から死までのあらゆる場面を左右しつつあるのか、逆に社会は科学研究をどのように取り込み、どのような仕組みでそれを運用しているのか、というような点に関して、鋭敏な洞察力と判断力を養うような教育である。そして、このカリキュラムは、当然のことながら、理系的適性のあるもの、ないもの、すべてに必須の『科学教育』となるべきである。そしてそれこそが、今日しきりに言い立てられる『科学リテラシー』ということの意味であろう」。(村上、164 頁)
- (54) もちろん、何もかも「知らない」と言って開き直ればよいということではない。「知らない」ことを自覚しつつ、どのように知ろうとすればよいのかという問いが、ここに現れる。物事を知ろうとする時、「己を越えて知ろうとする場合は既知の知識(己)が役立たないことが現に露わになるのに対して、知りたいと願う方は既知の知識(己)に更に付加しえるものを求めることになる。こうした違いに於いて観念や言葉ではない責任が露わになるのではないか。責任とは現に生じていること、既に起こったことに『対して』成立する存在関係だからである」。(田中、8 頁)
- (55) ただし、学際化、領域横断化が進んだ現在では、哲学以外の領域を専門とする研究者が哲学的な実践を行っていることも珍しくない。したがって、ハイデガーが挙げる哲学者の課題は、このような研究者たちにも共有されるべきものである。その意味で、本稿では「人文・社会系の研究者」と表現した。そして、当然のことながら、科学技術の専門家が哲学的実践を行うことを否定するわけでもない。科学技術を専門とするかしないかという区分によって問いを明確化するために、便宜上、本稿では科学技術の専門家と人文・社会系の専門家とを対比させたということである。

参考文献

- 木田元『ハイデガー「存在と時間」の構築』岩波現代文庫、2000年。
- 田中敦「3.11 —— 危機の所在といま生きているものの責任についての一つの理解 ——」、ICU 哲学研究会 第5回研究会・総会」配布資料、2012年3月3日。
- 中西真知子『再帰的近代社会 リフレクシブに変化するアイデンティティや感性、市場と公共性』ナカニシヤ出版、2007年。
- 平川秀幸「リスクガバナンスのパラダイム転換 —— リスク／不確実性の民主的統治に向けて ——」、『現代思想』2005年第5号。
- 藤垣裕子『専門知と公共性 科学技術社会論の構築へ向けて』東京大学出版会、2003年。
- 美馬達哉「リスク社会 1986 / 2011」、『現代思想』2012年3月号。
- 村上陽一郎『文化としての科学／技術』岩波書店、2001年。
- 森岡正博「現代において哲学するとはどのようなことなのか」、『哲学』第50号、1999年。
- Beck, Ulrich. *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp, 1986. (東廉、伊藤美登里訳『危険社会 —— 新しい近代への道』法政大学出版局、1998年)。
- Beck, Ulrich, Giddens, Anthony & Lash, Scott. *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity, 1994. (松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳『再帰的近代化 —— 近現代における政治、伝統、美的原理 ——』而立書房、1997年)。
- Giddens, Anthony. *The Consequences of Modernity*, Polity, 1990. (松尾精文、小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? —— モダニティの帰結 ——』而立書房、1993年)。
- Heidegger, Martin. *Gesamtausgabe*, 2, Vittorio Klostermann, 1977. (細谷貞雄訳『存在と時間 (上)』ちくま学芸文庫、1994年)。
- Weinberg, Alvin M. “Science and Trans-Science”, *Minerva*, 10, 1972.

**A Study of *Expertise* after March 11:
Interpreting Anthony Giddens' and Martin Heidegger's Reflections on
Science and Technology**

<Summary>

Yuki Hagiwara

The March 11 earthquake and tsunami and the corresponding nuclear accident, which hit the northeastern Japan, led the whole nation to question the privileged place of science and technology in the constitution of 'modern' civilization. What is at stake, however, is the incoherence and divergence of the discourses of experts in the face of the scale and effects of the disaster. There is no consensus, given the uncertainty of the situation. What is the role of the humanities and the social sciences in such a situation? This paper examines this question, drawing upon the works of Anthony Giddens and Martin Heidegger.

First, the paper draws on Giddens and argues that the expert system is a distinct characteristic of modern society. As long as the expert system functions without problem, it is hard to question the premise of the established system. However, once a disaster undermines the normalcy of society and the established system of knowledge lapses into a state of uncertainty, experts become unable to make a reasonable judgment and a correct decision upon that new circumstance.

Second, the paper focuses on the distinction between sciences and philosophy, which Heidegger introduced in his *Being and Time*. Heidegger states that sciences are conceived of as 'regional' theories because they work in the given, limited, themes and areas of study. As Heidegger states, "the objects of scientific knowledge present themselves as 'self-evident,' which require no further justification and which therefore can serve as a point of departure for a process

of deduction.” In contrast, philosophy can be called fundamental ontology. It questions the very foundations on which the objects of scientific knowledge rely.

Through these reflections, the paper argues that researchers in the humanities and the social sciences must participate in the critical situation like post-March 11 Japan, in order to question the foundational principles of social ordering that the sciences cannot answer on their own. Furthermore, the paper argues that they need to tackle the question of how the experts can become self-critical in a time of crisis.